No.42　2013.10

自然と人の文化

多治見市文化財保護センターだより

もくじ

・企画展「私たちの子ども時代」・・・・・・・・・・・・・1
・七代 加藤幸兵衛氏（三彩）が市無形文化財に ・・・・・2
・最近の寄贈資料紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・2
・平成25年度北小木のホタル生息数調査結果・・・・・・・3
・新羅神社修理と公開・・・・・・・・・・・・・・・・・3
・発掘調査速報・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
・講演会「発掘調査が語る永保寺の700年」・・・・・・・・4

企画展
私たちの子ども時代

展示期間：平成25年7月23日（火）～12月27日（金）

▲企画展の様子

平成に生まれ育った世代が社会に出て働き始め、数年が経過しました。「私たちの子ども時代」展を企画・担当している学芸員も平成元年（1989）生まれの20歳代です。この平成に育った20歳代と、その親世代、そして祖父母世代は、同じ多治見の中で育っていても異なった子ども時代を過ごしてきたのではないでしょうか。

本展では多治見で育った子どもに焦点をあてています。平成生まれでありこの数年で社会に出始めた20歳代、高度経済成長期を知る50～60歳代、戦中～戦後の混乱期を知る70～80歳代に子ども時代をどのように過ごしてきたのか聞き取り調査を行いました。その結果と合わせ、3世代の子ども時代をひなまつりなどの儀礼や普段の生活、学校生活で使用されていた資料とともに紹介します。

また、江戸時代以前の日本では時代や地域、階級などによって子ども観というものは様々な考え方をされていました。それが明治時代の学制の公布（明治5年・1872）などによる急激な近代化や義務教育の中で統一され、「純真無垢」な存在であるという新たな子ども観が普及していくことになります。この明治の近代化以降、「子ども観」を具現化する子ども用商品が相次いで開発されました。このように開発された子ども向け商品の中でも、窯業の盛んな東濃地方と関わりのある子ども用商品として、子ども茶碗があげられます。そのほとんどが上絵付という技法（一度釉薬をかけ焼いてからその上に絵を描き焼き付けたもの）により加飾されており、カラフルな絵柄が特徴の1つです。本展の後半ではこの子ども茶碗についても展示しています。

左：磁器上絵子ども茶碗
昭和30年代

右：土雛(舞娘)

発掘調査速報

住吉古窯跡群　発掘調査

場所：多治見市住吉町7丁目
　　多治見市金岡町5丁目
期間：平成25年4月下旬～

▲住吉5･6号窯跡

▲住吉11号窯跡

住吉古窯跡群は住吉町7丁目付近、陶都中学校の北側の丘陵地の南向き斜面にあり、1号から12号までの窯跡の存在が確認されていました。住吉土地区画整理事業の工事実施に伴い、記録保存をするための発掘調査を実施することになりました。

発掘調査は4月下旬から開始しました。窯跡は尾根に近い所と陶都中学校に近い麓付近に分かれて分布しています。発掘調査は尾根近くに分布していた5号、6号、7号、10号、12号窯から開始しました。調査の結果、山茶碗の5号、6号の窯跡と灰釉陶器の12号の窯跡が確認できました。10号窯と考えられていた箇所は、遺物の分布は確認できましたが、窯跡ではありませんでした。また、7号窯は斜面に窪んだ地形があったため窯跡があると考えていましたが、存在しませんでした。

尾根近くの窯跡の調査は8月中頃までに終了し、次に麓の標高の低い場所にある窯跡の調査に着手しました。発掘調査の開始直前に新たに存在が分かった13号窯と9号窯を調査しました。13号窯は灰釉陶器の小形の窯でしたが、9号窯は遺物の分布は確認できたものの、窯跡ではありませんでした。一番西側にあった11号窯も小形の灰釉陶器の窯で、陶土層を掘って築かれていて壁も堅く焼き締まっていました。窯道具である焼台も陶土を使ってあり、非常に堅く焼きしまっていました。

山茶碗の窯である2号窯の調査を、9月から10月にかけて行いました。この窯も陶土層を掘って築かれていました。比較的壁が良く残っていて天井の高さを推定することができそうなほどです。また、調査を進める中でそのすぐ右側にもう1基山茶碗の窯があることがわかり、この窯の調査も進めています。あと、1号、3号、4号の調査を残していますが、12月までに調査を完了する予定です。

講演会「発掘調査が語る永保寺の700年」

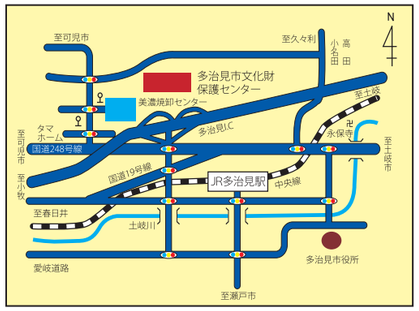
平成25年7月14日（日）、まなびパークたじみにおいて講演会「発掘調査が語る永保寺の700年」を開催しました。講師は、永保寺の発掘調査を担当した山内伸浩氏（多治見市職員）で、68名の参加がありました。

この講演会は、企画展「虎渓山永保寺～発掘と古文書が語る700年～」（7月3日～15日に移動展示をまなびパークで実施）の関連行事として開催しました。永保寺は、平成15年の火災により本堂・庫裡が全焼し、その火災後の再建計画に伴い、当センターで庫裡跡および本堂跡の発掘調査を実施しました。講演会では、平成15年の火災により焼失した建物跡から地中を掘り下げて行った順番に、明治時代、江戸時代、室町時代へと時代をさかのぼり、出土した遺構（建物跡）から見えてくる永保寺700年の歴史が紹介されました。講演会後は、企画展会場で学芸員による展示解説も行われました。

▲山内伸浩氏

▲展示解説の様子

利用案内
開館時間：9：00～17:00　休館日：土･日･祝日、年末年始　入場無料
〈交通案内〉タクシー：多治見駅から約20分
バス：「美濃焼団地前」下車徒歩5分
多治見駅前発　　可児駅前行
多治見駅北口発　皐ヶ丘9丁目行/桂ヶ丘1丁目行（金岡町経由）

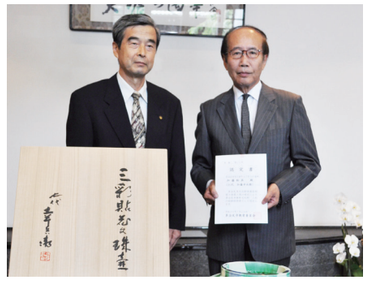


自然と人の文化
No.42　2013.10

編集／発行　多治見市文化財保護センター
〒507-0071
岐阜県多治見市旭ヶ丘10-6-26
TEL(0572)25-8633 FAX(0572)24-5033
URL http://www.city.tajimi.lg.jp/bunkazai/
（作成部数1,300部、作成費用24千円）

七代　加藤幸兵衛氏（三彩）が市無形文化財に

平成25年7月25日に「三彩」が多治見市無形文化財に指定され、加藤裕英氏（七代　加藤幸兵衛）が「三彩」の技術保持者として認定されました。指定を記念して七代 加藤幸兵衛氏より「三彩貼花文珠壷」を寄贈していただきました。この作品は平成25年12月25日（水）まで市役所ロビー1階にて展示しています。



▲認定書授与式
左：前教育長 村瀬登志夫氏
右：加藤幸兵衛氏

【三彩】

低火度で焼ける鉛釉系の色釉を2種以上で染め分けた陶器です。起源は中国と中近東にあり、1、2世紀に開発されました。中国で三彩の技法が発達し、7世紀末ごろから唐三彩が隆盛を極め、周辺諸国にも大きな影響を及ぼしています。日本にも技術が伝播し、8世紀に奈良三彩が作られるようになります。昭和55年、加藤卓男氏（1917～2005）は宮内庁からの依頼を受け、正倉院の奈良三彩の復元をしました。その三彩の技術が認められ、平成7年5月31日に国の重要無形文化財「三彩」の技術保持者として認定されました。

▲寄贈された「三彩貼花文珠壷」

【七代　加藤幸兵衛】

多治見市市之倉町にある文化元年（1804）より代々引き継がれてきた幸兵衛窯で加藤卓男氏の長男として生まれました。京都市立美術大学を卒業と同時に本格的に陶芸家の道を歩み、日展で特選、朝日陶芸展で最高賞を受賞するなど現代陶芸の分野に於いて活躍されてきました。

三彩の技法については、卓男氏が奈良三彩を復元した際に助手を務め、復元の一端を担っていましたが、卓男氏晩年の平成15年頃から本格的に三彩の制作を始めました。復元した奈良三彩やペルシア陶の技術を引き継ぐ一方で、独自の三彩を研究し、新たな色を表現した「銹彩」や「むらさき銹彩」を発表しています。

▲「むらさき銹彩」

三彩は歴史的には美濃焼の伝統技法ではありませんが、加藤卓男氏が正倉院御物を再現して国の重要無形文化財（人間国宝）になったことにより、新たな美濃の伝統的な技法の一つといえるものとなりました。父卓男氏の復活させた伝統的技術「三彩」を氏が受け継ぎ、さらに、それが美濃の伝統技法の一つとして後世へ伝承されていくことが期待されます。

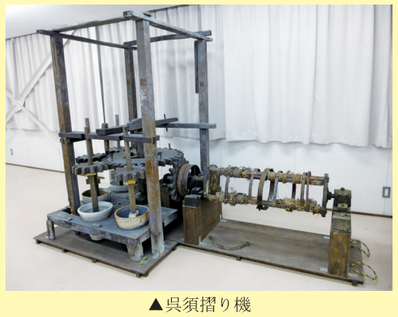
最近の寄贈資料紹介

機械ロクロと呉須摺り機

今年度、大正時代頃に製陶所に設置された大型窯業道具2点の寄贈がありました。1点は、市内平野町にある円正窯より初期の「機械ロクロ（ドウリョク）」、もう1点は滝呂町の五鳳製陶所からの「呉須摺り機」で、どちらも電気を動力とした機械です。

多治見市内に電気が通じたのは明治39年（1906）のことですが、やきものが主要産業だった当地では、電力がいちはやく製陶業に導入されています。上記2軒の製陶所も大正時代になってモロ（作業場）に電動モーターを設置し、天井裏や床下に埋め込んだプーリー（滑車）を回転させてロクロや土練機、釉摺り機などが自動で動くようにしました。大掛かりな設備投資をし、美濃焼の生産力向上をはかった先人達の努力が偲ばれるたいへん貴重な資料です。資料をご寄付いただきました市民の皆様に感謝申し上げます。

▲機械ロクロ(ドウリョク)



▲呉須摺り機

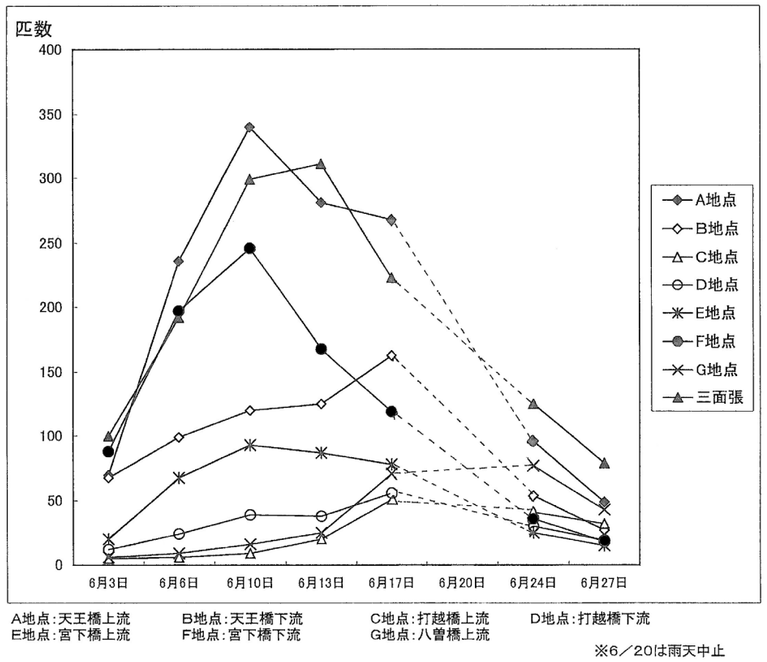
平成25年度北小木のホタル生息数調査結果

北小木町に毎年数多く飛び交う「北小木のホタル」は、多治見市天然記念物に指定されています。その発生状況について、今年も6月初めから7月半ばにかけて調査を行いました。調査は多くの市民の皆様にご協力をいただいて実施しました。

今年ゲンジボタルは大発生の年でした。特に上流地点でとても多く、三面張改修地点とその上流の地点では過去最高数が確認されました。発生時期は例年より早く、発生のピークは下流地点より上流地点のほうで早く、全体的には例年より早いという結果になりました。

ヘイケボタルは調査地点の中で最も上流の地点と最も下流の地点の2箇所で多く発生していました。しかし、1度水を切り乾田にする水田では生息が難しくなっているようです。

今年の調査データは今後の保護のための資料にするとともに、また、来年もホタルの生息数の調査を行っていく予定です。



▲北小木のホタル調査結果グラフ

新羅神社修理と公開

新羅神社社殿（多治見市御幸町）は嘉永元年（1848）に建立された権現造の建物です。平成18年3月10日に多治見市の有形文化財に指定されました。

▲新羅神社修理公開
左：講師の麓和善氏

▲彫刻の見学をする様子

社殿全体には尾張藩御用彫物師・早瀬長兵衛一族による彫刻が施され、壮麗な建物になっています。新羅神社は特に幣殿の縁廻りや基壇の傷みがひどく、平成24年度から25年度にかけて修理を行うことになりました。今年度は本殿基壇や拝殿向拝等の石工事、亀腹や本殿周りの土間たたき等の左官工事、拝殿柱や縁補修等の木工事、飾り金具補修、建て起し、調査等を行い、工事は9月末に終了しました。

▲柱の蟻害部分の補修

修理中である7月27日にその様子を一般公開しました。約120名が参加し、修理の設計施工監理を行っている名古屋工業大学大学院の麓和善 教授に講演会と現場説明を行っていただきました。講演会ではスライドにて修理で判明したことや彫刻等の話を聞き、その後現場にて実際に足場の上から彫刻を見ていただいたり、工事の様子を見学していただきました。